平成 24 年度学校評価（自己評価）

教育目標
み仏の知恵と慈悲に照らされて、他の人や、物のいのちの上に生かされ、み仏の限りない願の中に、命の尊さを知り大切にする。
１．仏様を拝み、生きものをいつくしむ子ども
２．明るくすなおで仲よくあそぶ子ども
３．正しいことばで、だれとでも話し合える子ども
４．元気でのびのびとした子ども
５．創造的で美しいものを喜こぶ子ども

教育目標
①動植物を愛護し、いたわりや思いやりの心を育み、基本的生活習慣を確立する。
②友達や地域社会の人々とのかかわりを通して協同・自主及び自律の精神の芽生えと主体性のある人間を目指す。
③健康・安全で幸福な生活に必要な、身体諸機能の調和的発達を図る。
④言葉の使いかたを正しく導き、童話、絵本等に対する興味や関心を養う。
⑤　自然に親しみ、表現活動（音楽、絵画）を通して、美しいものを喜ぶ豊かな感性を養う

１．本年度の重点目標

Ａ　教育理念・教育目標の再考、自己評価の推進
Ｂ　危機対応体制の整備
Ｃ　食育カリキュラムの編成

重点目標に対する取り組み、達成度、課題

Ａ　教育理念・教育目標の再考、自己評価の推進

教育体制において、最も上位に来る（言い換えると普遍性や抽象性の高い）理念、目標を再考することによって、その下位にある（言い換えると個別性や具体性の高い）教育課程、指導計画との有機的な結びつきを確認しつつ且つ下位のものを上位のものによって基礎づけることができるということが、目標再考の必然性である。

また、県の指導主事による幼稚園訪問の折になされた指導も再考の契機の一つとなった。その内容は、われわれが「教育課程」と呼んできたものは「年間計画」であって、教育課程とは「教育理念」「教育目標」を指すというものであった（ただし、「教育目標」等に連結させた「年間計画」をも含めたものを「教育課程」という場合もあるとのこと）。

そして、計画、実践、反省というサイクルの最後、評価をして課題を見つけて、新しい

計画に反映するといういわゆる「ＰＤＣＡサイクル」が展開するのであるが、そのための自己評価も再考した。

Ａ１．教育理念・教育目標の再考

教育理念、教育目標については従来職員間で議論してきた「案」に、他園の目標を照らして考えたり、専門家の意見を聞いて再考したりしてきた。

理事長により、従来の「教育目標」の前文が、園の創始者西元龍拳師の建学の精神であることを教えられたので、その文章を「建学の精神」として掲げ、それに続いて「教育理念」「教育目標」を位置づける提案をし、理事会でも承認された。

Ａ２．自己評価の推進

二つの自己評価に関わる書式を作った。一つは記述式で、年度当初から「目標」、それに到達するための手段、反省、課題、課題の再目標化を、書けるようにしたもの。もう一つは、評価項目で、従来利用していた全日本私立幼稚園幼児教育機構の自己評価項目を厳選し、本園に合ったものを加え、さらに改訂されつつあった鳥取県幼児教育振興プログラムの構図をも参考にしつつ、新たな評価項目を作った。

この評価項目を用いながら、その都度加筆修正していくこと、評価を確実に行って課題を発見し再計画化していくこと、これが次年度以降の課題となる。

Ｂ　危機対応体制の整備

Ｂ１　避難訓練の内容を吟味し、多様な訓練を視野に入れ、それを毎月行い記録し、課題発見に努めた。

昨年度ＰＴＡからライフジャケットを全園児・教員分送られたこと、避難用に屋上に上がれるための工事をしたことなどが、その契機となっている。

毎月の訓練事前事後のミーティングにより危機感を呼び起こされるので、新鮮な危機意識を維持するためには毎月の訓練を着実に行うことが有効だと実感した。

Ｂ２　避難訓練をはじめとした訓練や防火体制を組み込んだ防災計画を、津波や諸々の警報の際の連絡体制などを含んだものを作成中であるが、年度途中に、市や県の放射能事故に対する避難マニュアルの作成等が関係してきたこともあって、完成はできず、来年度の課題として残った。

Ｂ３　遊具点検は、毎月 2 名で内外の危険箇所のチェックを行う予定であったが、日々気づいたことをその日のミーティングで共有することはあるのだが、書式に基づいた点検ができない月もあった。来年度は着実に行う必要がある。

Ｃ　食育カリキュラムの編成

鳥取県西部幼児教育研究会は平成 22、23 年度の継続研究を私立幼稚園中国地区大会で発表した。その成果物を参考にその研究に参加した教員を中心に本園での食育活動を整理し、ねらい等を園内研修で考察した。カリキュラムとして文章化してまとめるまでは、あと一歩のところでとどまっている。来年度の課題である。

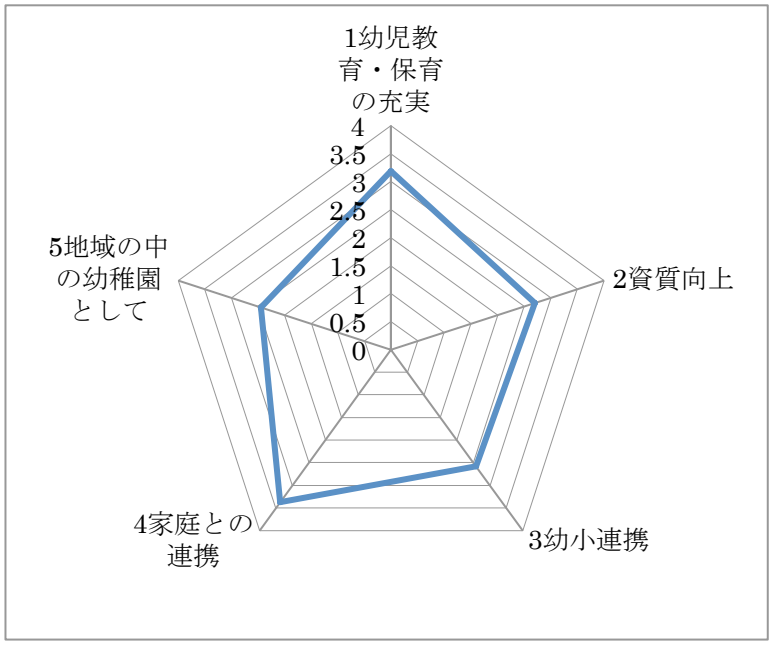
プランタでの野菜栽培とその収穫ですぐちょっとした調理をするという活動が、昨年度より頻繁に行われた。大きく構えず、気軽さが功を奏したといえるであろう。

大きく構えるのは「お魚探険隊」である。本活動は、食育にも関係する総合的な経験であるが、その活動の意義が、「キラリと光る食育推進活動」として認められ「知事表彰」を受けた。年長児がイワシを手開きするのに伴う、年少児たちの調理の度合いや、野菜調達の仕方も、昨年より展開し意義のあるものになっている。年中児は全体で作るつみれ汁の野菜切りを担当するのであるが、それまでに学んだことを生かすために、畑で収穫するところまでも活動に取り入れた。いわば「お魚探険隊」にならぶ「お野菜探険隊」である。これは前者の、切り身ではなく生き物丸ごとを経験するという理念を、野菜においても実現しようとしたものといえる。

さらに来年度は、その野菜を幼稚園の菜園で育てることから始める予定である。

２．教員の自己評価

重点目標のＡ２でも述べたとおり、自己評価項目を更新した。教員がチェックしたものを集計したのが以下のグラフである。



１の「幼児教育・保育の充実」に関しては、その計画、現場でのあり方、反省の項目にわたって評価をした。１と４の「家庭との連携」は比較的高い自己評価結果が出ているが、それらはまさに幼稚園生活に直結する日々の営みだからであろう。

それに対し、２の「資質向上」に関しては、今年度は職員体制により、園外研修に出るのが困難であった状況を反映していると思われる。日常の保育に比べれば、やや個別のテーマとみなされる「幼小連携」「地域」との関わりに弱みがあることが示された結果となっている。いづれも、研修を高めることで、個別テーマとみなされたことを日常化することが本園の教育体制の課題と言えるであろう。